# 手作り児童文化財を用いた保育実践指導報告 第１報
## ――保育学科１年生を対象にした保育実技発表会を通して――

濱　田　英　司

# Childcare Department Guidance Report No.1: A practical skills presentation on the use of handmade cultural assets in childcare practice

by
Eiji Hamada

**要旨**

本稿は、平成28（2016）年度に初回を開催して以降、年に１回学内で前期末に行っている「手作り児童文化財を用いた保育実技発表会」を土台とした、平成30（2018）年度における保育学科授業活動「保育実習指導Ⅰ」の中で行った手作りの児童文化財を用いた実技発表に関する指導実践報告である。報告者は、様々な身近な素材や廃材を用いた児童文化財の製作方法や、保育施設での子どもに向けた実践の方法等についても配慮しながら指導をしてきた。本稿では、児童文化財を用いた保育実技の発表を通して報告者自身が感じた、保育施設での実際の保育実践と、学生への指導との違いについての検討と今後の活動への展開について報告を行った。

キーワード：児童文化財、保育実技、手遊び、紙芝居、大型絵本、ペープサート、パネルシアター、エプロンシアター

## 1　はじめに

報告者は、保育教諭としての６年間にわたる認定こども園での勤務経験（平成22年度～平成27年度）を有し、そのうち２年間は主幹保育教諭として保育現場での保育実践及び保育教諭の指導に当たってきた。現在は保育学科における保育実践指導教員として（平成28年度～至現在）保育施設において子どもに向けて実践することを前提とした児童文化財の製作及び発表の指導を行っている。具体的には、ペープサートやパネルシアター、エプロンシアター等の

児童文化財の製作方法や、子どもの前で実践する上での多様な表現方法について配慮しながら指導をしてきた。本稿では以下、平成30年度の保育実践指導の活動報告を行う。

## 2　実践概要

対象となる学生は保育学科１年生、合計38名（男子学生２名、女子学生36名）で、保育士資格必修科目として前期15回の授業を行った。指導においては授業開講以降、児童文化財の製作ではなく、発表を重視した。発表については保育現場における子どもたちの発達や興味・関心を捉えた上で、ねらいをもって表現豊かに演じられることを目標とした。保育学科１年生が入学してまだ間もない時期であったこともあり、発表内容としては、広く保育現場で行われている手遊びをはじめとして、市販されている絵本、紙芝居、ペープサート、パネルシアター、エプロンシアター等の児童文化財についても紹介した。そして指導担当者（報告者）が手本として演じる内容を学生が子どもの視点に立ち実際に体験することから始めた。

### 2・1　発表場所と表現方法の指導

保育実技発表会の開催にあたり、学生達に環境を予め伝えることとした。保育実技発表会会場は、発表を行うだけの十分な広さが確保できること、発表者以外の学生が床に座り参加型で進行できること、発表する学生がステージ上で表現することもできること、以上の３点から、音楽棟（Ｃ棟）３階のホールで開催することとした。また、児童文化財と言っても多岐にわたるため、学生本人による手作りの作品であること、絵本・紙芝居・ペープサート・パネルシアター・エプロンシアターのいずれかであること、という２つの条件を付けた。さらに、保育現場での実践を考慮し、保育実技発表会では、見学している参加学生たちを幼児に見立て、まず導入として手遊びをしてから児童文化財を用いた実技発表を展開する構成で発表することとした。そして発表会場、発表方法を踏まえて、６月中旬から保育実技発表会に向けて学生自らが題材選びをしていき、製作を進めていくよう指導した。次に、表現方法の指導をしていくにあたって指導担当者（報告者）が学生に手本として実践指導した内容を下記に示す。

### 2・2　実践指導内容について

５月上旬から手作り児童文化財を用いた保育実践の指導を行うにあたっては、可能な限り指導担当者（報告者）本人が手作りで製作し、保育者として子どもたちに実際に演じていた児童文化財を教材として用いるようにした。

### 2・2・1　手遊び

写真１　手遊びの実践指導をする報告者

主活動への集中力を高めるとともに、円滑に次の活動に移行していくための技法として用いられる手遊びについての実践指導を行った（**写真１**）。手遊びは歌遊び、リズムあそび、劇遊び等にも発展させることができ、展開できる保育実技でもある。報告者が実際に一般的な手遊びを複数演じた上で、学生たちには実際に真似をしながら体得していくという方法で指導を行った。基本的な手の動かし方や、リズムに合わせた歌詞を掲載した資料は用意しておいたが、まずは自分自身が体験して、楽しさを味わい“習う”よりも“慣れる”事を一番の目的として、体験型の指導を行った。したがって、振付などの手引きとしての資料は事前に配布せず、実際にやってみた後での確認及び解説用として配布をした。

そこで、指導において手遊びの目的や表現方法の違いを紹介し、説明するために実践したものが、子どもたちにも人気があり馴染みの深い「とんとんとんとんひげじいさん」の手遊びである。リズムに合わせ両手でおじいさんのひげや、こぶなどを表現していくもので、比較的月齢の低い子どもにも親しみやすい内容である。子どもたちの興味を引き付けるきっかけにもなる上、落ち着いて次の活動に移っていけるよう「手はおひざ」というフレーズで終えやすい内容でもある。また、人気のアニメーションキャラクターが登場する等、様々にアレンジをしやすい内容でもあり、手遊びを身に付けていくきっかけ作りとして用いた。

手遊びの指導においては、全体を通して、学生たちも楽しみながら参加する姿が見られた。一方で、恥ずかしがって思うように表現できない学生の姿も散見されたため、今後たくさんの手遊びを身に付けていく上で、自分が演じてみたいと思う手遊びを自ら探し、自分の保育力の一つに加えていくための意識付けに繋げていく必要があると感じた。

### 2・2・2　手作り児童文化財

①　紙芝居

紙芝居の表現指導においては、あきやまただし『からすのたまごにいちゃん』を基に、報告者が絵本の内容を八つ切り画用紙10枚に描き直して制作した手作り紙芝居を教材として用いた。最初に報告者が物語の展開が伝わりやすいよう間の取り方等を意識しながら演じ、演じ終えた後で、紙芝居の基本的な持ち方や抜き方、細かい演じ方等について改めて解説を加えた。全体的に物語の展開に見入る機会が多かったが、それとは別に、絵本を基にして色画用紙に描き移す技法について関心を持った学生も多く見られた。

また、紙芝居の機能を学ぶための教材として相応しい作品の視点、即ち、①内容が分かりやすく親しみやすい、②抜き方によって演じる上での表現の違いが見えやすい、③紙芝居を観る人との掛け合いの機会が多く含まれる、という３点を学生に示し、具体的な作品として、まついのりこ『ごきげんのわるいコックさん』を選び、教材として用い、報告者が学生に上演した。場面ごとの文章は比較的短いシンプルな内容であるが、時に声色を変えながら、ゆったりと感情豊かに演じるよう心掛けた。そのため、時折笑い声も上がり、指導担当者（報告者）からの「コックさん、どこに行ったのかな？　みんなのそばにいない？」という問いかけに対して「いないよ～」「次のページじゃない？」等、子どもの視点から返事を返す学生の様子も多く見られ、実際に自分が演じる時の表現方法についての参考になったものと思われる。

②　大型絵本読み聞かせ

保育実技発表会においては、40名近い学生たちを前にしてステージ上で行うことになるので、大人数を対象としても見やすい大型絵本を授業時の教材として選定した。選書の基準としては、①幼児にも馴染みがあり、分かりやすい内容である、②絵の輪郭や色彩がはっきりとしていて見えやすい、③読み聞かせ以外の方法でも世界観が多様に表現できること、以上３点を主眼とし、エリック・カール『はらぺこあおむし』を示した。読み聞かせを行うに当たっては、あおむしが食べていった物を順に指差しながら読み進めたり、見ている学生たちの表情を確認しながら時に語り掛けるような話し方で読み聞かせていくようにした。そのため、大人数に対し、大型絵本ならではのダイナミックな表現を示すことができた。

③　絵本ソングシアター

大型絵本を使った表現の多様性について示す目的で、『はらぺこあおむし』の読み聞かせを行った直後に、同じ絵本を使ってソングシアターを行った。CDを使い『はらぺこあおむし』の伴奏曲を流し、指導担当者（報告者）が歌いながら絵本を見せる実践を行った。『はらぺこあおむし』の物語に併せたメロディーがあることを知らない学生も多かったが、中には一緒に口ずさむ姿も見られた。絵本を読み聞かせるというだけではなく、時にメロディーに乗せ、簡単なリズムを交えて展開に広がりやメリハリを付けるという事も保育表現の技法の一つであるという事を示すことができた。

④　ペープサート

ペープサートを用いた物語の世界を伝えることを目的として、報告者が作ったペープサートを上演した。白画用紙に水彩絵の具や色鉛筆で着色し、油性マジックで縁取りをした後、型に合わせて切り抜き、割り箸を付けて完成させた手作りのペープサート「十二支のはじまり」を

教材として使用した（**写真 2**）。神様をはじめとして、数多くの動物等が登場するため、見た目にも賑やかな作品でもある。表裏を使ったり、重ね合わせたり、揺らしたりする等、ペープサートならではの演じ方を示した。また、登場した動物たちを立てて並べていくための台座も段ボールに色画用紙等を貼り付けて製作した。また、アルミホイルの芯を組み合わせて鳥居を製作し、山奥の神社を表現し、物語の世界観が伝わりやすいよう工夫した。動物たちが登場してくる際には、その特徴や鳴き声を演じ分け、物語の展開に沿ってそれらが次第に台座の上に並んでくる様子は、学生たちにとって保育実技に対する新たな発見を導き出す良いきっかけとした。

**写真 2　ペープサート「十二支のはじまり」**

⑤　パネルシアター

パネルシアターの表現方法や世界観を伝えることを目的として、報告者が作ったパネルシアターを上演した。上演する題材としては、子ども向けの歌があり、歌詞に出てくる内容を歌に合わせてパネルの上に表現していくことができる『そうだったらいいのにな』を選定した。演じる際には CD を用いず、報告者がアカペラで歌いながら演じ進めていくという手法で行った。その後、パネルシアターの仕組みや、動かし方、貼り方等についての詳しい説明を加えた（**写真 3**）。不織布を貼ったパネル台に貼り付き、歌詞の世界が出来上がっていく様子や、歌に合わせて手軽に演じられる様子等は、学生たちの関心をよりいっそう引き出すきっかけになったようである。さらに「そうだったらいいのにな」の歌に合わせて演じた後で、子どもたちに夢や憧れについての話をしていくための導入としても活用できること等を示し、児童文化財の保育への活用の仕方が、単一的ではないことも指導することができた。

**写真 3　パネルシアターの実践指導をする報告者**

⑥　エプロンシアター

報告者が手作りしたエプロンシアターを教材として使用した。手芸店で購入したキルト生地を、採寸して切り抜き、ミシンで淵を縫い、余った生地で登場人物等を入れるポケットを付け

写真４　エプロンシアター「みんなでつくろう白いイス」

完成させたものである。登場人物であるクマ、ゾウ、ブタ、ウサギは市販のキットを購入し、綿を詰め、縫い合わせて完成させた。その他、縫い付けてある丸太や、マジックテープで貼り付けられるように加工してある木の板、釘、金槌、刷毛はそれぞれフェルトを使って製作した。また、エプロンシアターに限らず、児童文化財を製作する際には、既存の絵本や歌、物語等のあらすじ通りに製作しなければならないわけではなく、自分で工夫して考えたオリジナルストーリーの内容でも良いことを示す目的で、報告者が独自に考案した「みんなでつくろう白いイス」という物語を題材とした（**写真４**）。

製作に比較的手間はかかるが、布素材のやわらかい印象と、エプロン自体を舞台とした、動きのある世界観を示すことができた。

### ２・３「保育実技発表会」の開催について

保育実技発表会の開催については、かねてより学生たちにも告知をした上で授業を進めた。発表に当たり、学生たちに目的として、①これからの保育現場での実践に向けた経験の場とすること、②手作りで準備することを通して児童文化財の意義を知ること、③自分以外の学生の発表を見て参考にすること、以上３点を意識して臨むよう指導した。

#### ２・３・１　発表順の決定方法

保育実技発表会での発表順は、学籍番号（50 音）順に行う方法もあるが、今回は学生たち一人ひとりの意欲や希望を尊重し、全員による話し合いで発表順を決定した。指導担当者（報告者）から直接の助言等は一切行わなかったが、学生たち自身で集まり、発表順について「早い方が良い」「遅い方が良い」「真ん中あたりが良い」等、次第に声が上がり、やがていくつかのグループに分かれ、互いにコミュニケーションをとりながら和やかに決定した。

#### ２・３・２　発表の手順と方法

発表順の決定後、改めて発表の手順や方法について説明を行った。具体的には、①手作り児童文化財を用いた保育実技発表を行う前に手遊びを１つ行うこと、②発表時には実習用エプロンを着用すること（エプロンシアターの場合を除く）、③全員に見えやすいよう立ち位置を考慮し、ステージを活用すること、以上３点である。発表の始め方と終わり方については学生に

一任し、参加学生たちを幼児と想定し、学生たち自身で自由に展開してもらうようにした。参加学生には発表以外の時間を活用して、自らの発表や同級生の発表に対する反省や感想を記入するシートを配布し、気付きがある度に書き留めていくように指導した。

発表の具体的な実践状況について下記に示す。

①導入としての手遊び

各発表では、まず手遊びを１つ行ってから手作り児童文化財を用いた保育実技を実践した。見学の学生たちも子どもの立場で発表者の進行に沿って、一緒に手遊び等に参加した（**写真5**）。

**写真５　手遊びの実践風景**
**（左：ステージ上で手遊びをする学生、右：発表者と一緒に手遊びをする参加学生）**

参加学生たちの前に立ち、手遊びを実践する事が初めての経験であるので、緊張して思うように声が出ない学生や表情が硬く感じられる学生の姿もあった。また、何の手遊びをするかがなかなか決まらず、直前になって何となく用意してきた者や、授業時に指導担当者（報告者）が例示したものを恥ずかしそうに実践する学生の姿も見られた。その一方で、指導担当者（報告者）自身も知らないような手遊びを練習してきた学生や、様々に独自のアレンジを加えて参加学生たちを巻き込んで豊かに表現する学生もいた。いずれにしても、まず手遊びを１つ行って、それから手作りで用意した児童文化財の披露に繋げる事を指定したことで、発表する学生にとってもスムーズに実践しやすくなった。また、各々の手遊びを通じて全体の意識をさらに高めることにも繋がり、それは発表会全体をよりいっそう充実させた要因となった。

②エプロンの着用

入学直後より学生たちは学外実習用として各々エプロンを製作していたため、これからの保育現場での実践に向けて、今回の発表をする際にもエプロンを着用して行うこととした（**写真6**）。

手作りのエプロンシアターを準備してきた学生は、エプロンを重ねて着なかった。しかし、

**写真６　エプロンを着用してペープサートをする学生**

ペープサート等を演じる学生にとっては、保育者としての意識を高めるきっかけになると共に、演じる中でエプロンのポケットを活用する学生もいたので、極力保育現場での実践に近い形で行うことの意義を改めて感じた。普段の授業の中でも、実習用エプロンを着用する機会は多くはないので、発表を通じてよりいっそう学生達の個性を引き出すことができた。

③ステージの活用

今回の発表会では音楽棟（Ｃ棟）３階のホールを会場としており、発表用のステージが常設されていたため、発表者は自分が製作した児童文化財の内容や発表する内容を考慮した上でステージを活用できるようにした（**写真７**）。

しかし参加学生たちは床に座った状態で見学しているため、発表者によっては、ペープサート等、遠くなると見えにくくなる作品や、幼児に見立てた参加学生との身近な掛け合いを想定した発表内容の場合にはステージ下での発表でも良いこととした。いずれの場合においても、保育現場での実践を視野に入れて発表を行ってもらうようにした。ステージに上がって保育実技を行うことで、緊張が高まったと思われるが、いつも以上に伸び伸びと自己表現をする必要があることを示すことができた。

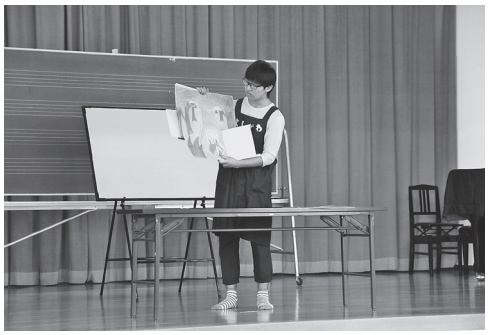

**写真７　ステージ上で発表をする学生**

## 3　発表後の反省・感想

発表会全体を通して、学生たちが書き留めた記入シートから出た反省点や感想は下記の通りである。

【発表者としての反省・感想】

- ステージ上で緊張しすぎて台詞を忘れてしまったので、事前にもっとしっかり練習をしておけば良かった。
- ペープサートをする時、下を向いてしまいがちだったので、もっと前を向いて見ている人の反応を確認しながら進めていけばよかった。
- 緊張してみんなの顔を見ながら発表することができなかったので、次は大きな声を出してできるように頑張りたい。
- 緊張すると練習よりも話し方が速くなってしまったように感じた。
- 練習不足で、演じているときに間（沈黙）ができてしまった。
- 見ている時に想像していたのと、前に立った時の実際の見え方は違うので、演じる上で気を付けなければいけないことがたくさんあると感じた。
- 友だちの前で、つい普段の話し方が出てしまったので、もっと子どもの目線で発表できたら良かった。
- 恥ずかしく、とても緊張していたが、みんなが一緒に歌ってくれたので緊張もほぐれ、とても嬉しかった。
- パネルシアターをしてみたいと思ったので、次の機会にはぜひ作ってみたい。
- エプロンシアターは見ていてとても楽しく、工夫もたくさんあって、自分もやってみたいと思った。

【見学者としての気付き・感想】

- 同じ歌や手遊びでも一人ひとり個性があり、雰囲気が違って良かった。
- 同じ物語でもペープサートとエプロンシアターでは印象が全く違うことがよく分かった。
- 紙芝居でのオリジナルのストーリーは見ていてとても楽しかったし、アドリブも入っていてすごいなと思った。
- ペープサートで「めくる」「クルクル回す」という発想や、仕掛け付きの紙芝居などは見ていてとても楽しく、新しい発見があった。
- ペープサートを演じる時の小道具が充実していると、見た目も豪華になり良いなと思った。

- エプロンシアターは製作するのが難しそうだが、その分、聞き手に分かりやすく伝わり、話に引き込まれた。
- クイズなどでみんなへの問いかけがあると、みんなで一緒に考えることができ、よりいっそう楽しむことができた。
- 笑顔で楽しそうに演じているのを見ると、見ている側も笑顔になれたので、表情は大切だと思った。
- 「みなさんも一緒にやってみましょう」という声が小さいと、遠慮がちになってしまい一体感が生まれにくいように感じた。
- 歌の歌詞が分からない時があったので、発表者がもう少しリードしてくれるとやりやすかった。
- 季節に合わせて、発表内容をアレンジしていたのが良かった。
- 見たことのない手遊びもあってとても勉強になった。
- 手遊びや歌をゆっくり歌っているのを見ると、子どもたちでも真似して歌いやすいだろうなと思った。
- 手遊び歌など、たくさんのレパートリーを持っていると、保育現場でも役に立つと思ったので、これからもいろいろと練習していきたい。

## 4　おわりに　―今後の保育実践指導と授業展開について―

本稿では、平成30年度における授業活動「保育実習指導Ⅰ（前期）」における手作り児童文化財を用いた保育実践指導と前期末に行った保育実技発表会での発表を中心に報告を行った。

報告者にとって、本発表会は3年目（3度目）であり、将来の保育現場での実践を見据えて、学生が主体的に教材研究に取り組み演じていくきっかけを提供することを目的として指導に当たってきた。保育学科１年生にとっては、入学してまだ半年という段階で発表会を迎えることになるが、授業活動を通して児童文化財についての基本的な技術、知識を習得し、本発表会に向けて自ら検討や製作をする過程も重要であると考えている。また、本発表会に向けての学生の取り組みについては、学生相互が時に意見やアイデアを交わし合ったこともあり、自然と学生同士のコミュニケーションも豊かになっていった。さらに、本発表会を通じて、学生たちにとって多くの気付きや今後への課題が得られたことはとても意義深いことであると感じている。したがって、本発表会と授業展開の目標である「保育現場における子どもたちの発達や興味・関心を捉えた上で、ねらいをもって表現豊かに演じる」は、概ね達成できたと考えられる。

指導担当者（報告者）は認定こども園での勤務及び指導経験を有し、自身が保育現場で活用

していた手作りの児童文化財を用いて、学生たちに保育実技を間近で実演し解説を行うことができた。しかし一方で、保育教諭に指導する内容と、保育学生に指導する内容では知識や技術、経験さらには意欲に大きな差があるので、授業活動を通じて段階的に指導していくことの難しさを痛感したのも事実である。学生達によるアンケート結果からも分かるように、それぞれの児童文化財が持つ世界観や表現技法についての特長についての受け取り方は一人ひとり違うという事である。

今回、学生たちへの指導においては、児童文化財についての事前の詳しい解説や紹介は極力避け、端的に内容説明をした後で、まずは実演を見てもらうという形式を意識した。学生たちの興味・関心が湧いた状態で、まずは各々が保育実技に触れて欲しいという意図があった。保育実技の実践については、学生によって意欲にも差があるように感じた。指導に関してはクラス単位で行い、全員一斉指導の形になるため、学生たち一人ひとりの個性や理解度、さらには興味や意欲の度合いも考慮した上で個々に合った実践内容や指導の方法を検討していく必要がある。

今回の実践指導については、指導担当者（報告者）本人の手作りによる児童文化財を主な教材としたため、種類が少なく、教材の量としては不十分であったと考えられる。それは、授業内で紹介しきれなかった技法を自ら研究し、保育実技発表会において披露した学生がいたことに象徴される。初めて見る実技内容に新たな発見を見出した学生も少なくないが、指導担当者（報告者）による事前の指導や助言という部分においては、さらに豊富な教材を準備し、時間をかけて幅広く紹介しておく必要があると感じた。ただ、技法や活用法の全てを説明しすぎるあまり、逆に学生たちが題材選びをする際に視野が狭くなったり、余計な先入観を持ったりすることは避けるようにしたい。いずれにせよ、今回は、学生相互の学び合いという形で、気付きや課題が多く得られたが、授業活動を進める以前に、学生たちの保育への情熱や関心をよりいっそう引き出し、形にしていくための意識付けを十分に行った上で、実践指導に入っていく必要があるという事に改めて気付かされた。

今後の保育実践指導と授業展開についての課題としては、保育現場における子どもたちの反応の良し悪しという観点のみで児童文化財や保育実技内容を選定するのではなく、まずは学生自身の興味・関心を軸として保育実技の検討を進めていくことである。そのためにも、今後より多くの教材を提示し、指導していくようにしたい。そして、身近な素材や廃材等を活用して製作できる保育教材についても授業活動に取り入れ、保育実技の世界の広さとやりがいについても伝えていくようにしたい。

今回の発表会で得た経験を基に、学生たち一人ひとりが保育実技について自分自身で考え、製作し、演じることに自信と喜びを得ていけるように援助する必要がある。そのためにも、指導担当者（報告者）自身がさらに広い視野と目的を持ち、保育実践をより豊かにするきっかけ

作りや表現方法についても検討していく必要がある。それにより、保育現場では思うように時間をかけて取り組めないような保育内容についても、学生たちが研究及び製作活動に意欲的に取り組むことができるようになると考えている。そして、実践と考察を繰り返しながら、学生たちが自分らしい保育のスタイルを確立していけるよう導いていきたい。

**参考文献**

1）塩田博子・堀尾昇平・高杉志緒・芳賀絵美子・濱田英司：「第４回　おいしいね　たのしいね！」地域貢献事業開催報告，下関短期大学紀要，35 号，pp.45-68，2017 年
2）塩田博子・堀尾昇平・高杉志緒・芳賀絵美子・濱田英司：「第５回　おいしいね　たのしいね！」地域貢献事業開催報告，下関短期大学紀要，36 号，pp.73-97，2018 年
3）高杉志緒：保育学科ゼミナールにおける「食育」実践報告 第５報―平成 25 年度の大型紙芝居制作・発表を中心に―，下関短期大学紀要，35 号，pp.19-44，2017 年